

興国寺

興国寺は日本の禅宗の歴史において重要な役割を果たしており、かつては西日本最大級の禅寺でした。この寺院は鎌倉幕府の 3 代将軍源実朝（1192 年～ 1219 年）の菩提を弔うために 1227 年に創建されました。何世紀にもわたってこの名刹の規模は縮小しましたがその敷地は依然として広大で一年中美しい姿を見せてくれます。

興国寺は西方寺として創建され、当初は密教真言宗に属していました。1258 年、禅師心地覚心（1207 年～1298 年）が住職に就任し、臨済宗に改宗して興国寺と改名しました。京都の天皇から鎌倉を拠点とする武士という新たな支配階級への政治的権威の移譲を特徴とする日本史の過渡期の真っ只中にこの変革が起こりました。この時代は日本の仏教が急速に多様化した時代のひとつでした。禅宗は日本では比較的新しく、鎌倉幕府のもとで栄えました。覚心は都以外にも信仰を広める重要な役割を果たし、興国寺を国内有数の禅寺として発展させました。

現在、この名刹は主に本堂(法堂)、瞑想ホール(禅堂)、開山者の堂(開山堂) などのいくつかの堂で構成されています。開山者の堂は、後醍醐天皇（在位 1318 年 ～ 1339 年）から法燈円明国師（完全に目覚めた法灯の国師という意味）の号を追贈された心地覚心を祀っています。この堂は彼の埋葬地の上に建てられており、尊敬される師の木像が安置されています。